

連載コラム



みずき野と  
その周辺の  
植物と昆虫



第27回

きれいな虫たち(3)

～ ガの仲間 ～



もとよし ふさお  
本吉 總男

2016年10月

チョウもガも分類学ではチョウ目<sup>もく</sup>に属する昆虫です。どちらも幼虫は芋虫か毛虫で、その多くは植物の葉を食べ、蛹<sup>さなぎ</sup>を経て、翅<sup>はね</sup>が細かい鱗片で覆われた成虫になります。実はチョウとガと区別するはっきりした定義はないのです。

強いて言えば、大部分のチョウは先端が棍棒状の触角をもち、ガは糸状の触角（一部のガの雄の触覚は櫛型）をもつことです。でも、ガでも棍棒状の触覚をもつものも稀にはあります。チョウは翅<sup>はね</sup>を立てて止まり、ガは翅<sup>はね</sup>を開くか、または屋根型にして止まると一般に言われますが、チョウもよく翅<sup>はね</sup>を開いて止まり、ガにも翅<sup>はね</sup>を立てて止まる種があります。チョウは昼に活動し、夜に飛ぶことはありません。それに対し、ガは主として夜行性ですが、昼に飛ぶガもかなりいます。

このように、チョウとガを定義によって区別することはできないのですが、分類学では、それぞれの共通の特徴を詳細に調べることによって、例えばアゲハチョウ、シロチョウ、タテハチョウ、ヤママユガ、ヤガ、メイガなど、いくつもの仲間（分類学では科という）に分けています。しかし分類学を知らない人も、一見してこれはチョウ、これはガとかなり正確に判断しているように思われます。それはチョウとガの際立ったイメージの違いによるのかもしれませんが。チョウは陽気で、ガは陰気。あるいは、チョウは美しく、ガは美しくないというのが一般的なイメージでしょうか。したがって、チョウは好きだが、ガは嫌いだという人は多いと思います。

でも、私はガにはチョウとは対照的な美しさがあると感じています。今回は、みずき野周辺に見られる美しいと感じられるガのいくつかについて、述べてみたいと思います。なお、私は夜には散歩しませんので、写真はすべて日中に撮ったものです。

なお、本文の中で、「開張<sup>かいちょう</sup>」という語を使います。開張とは、ガやチョウが翅<sup>はね</sup>を開いたときの左右の翅<sup>はね</sup>の先端から先端までの長さのことで、ガやチョウの大きさを表します。

## 1 シャクガの仲間

シャクガと呼ばれるガの幼虫は、いわゆるシャクトリムシ（尺取虫）です。シャクトリムシは芋虫ですが、通常の芋虫とは異なり、脚が体の前方と後方のみについて、中央の脚は退化しています。そのため、体をΩ型に屈伸させながら歩きます。したが

って尺を取る、すなわち、物の長さをはかっているように見えるので、この名がつけました。シャクガにはたくさんの種がありますが、美しいと思われるものを選んでみました。

シロツバメエダシャク（開張：4～5cm）9月下旬 7丁目



シロツバメエダシャクは翅<sup>はね</sup>に茶色の帯のある白いガです。幼虫は、みずき野周辺でよく見かけるキャラボクやイヌガヤの葉を食べていると推測されます。この写真はわが家の庭で撮ったものです。

ユウマダラエダシャク（開張：2～3cm）5月下旬 本町地区



ユウマダラエダシャクは、翅<sup>はね</sup>が墨絵のような模様の美しいガです。幼虫はマサキ、コマユミなどを食樹とします。

ウメエダシャク（開張：3.5～4.5cm）6月上旬 7丁目



ウメエダシャクは黒地にくっきりした白い斑紋があります。ウメの葉が繁る頃、昼間にウメの葉陰をひらひら飛んでいる姿をよく目にします。この写真はわが家の庭で撮りました。幼虫は主としてウメ、モモなどの葉を食べます。

マエキオエダシャク（開張：2～3cm）7月下旬 7丁目



マエキオエダシャクは個体によって翅<sup>はね</sup>の色が異なりますが、この写真は白から褐色へのグラデーションが美しいマエキオエダシャクです。わが家の門扉を支える壁に止まっていた。幼虫の食樹はイヌツゲ、ソヨゴ、タラヨウなどですが、みずき野周辺に多いイヌツゲの葉を食べていると思います。

クロクモエダシャク（開張：3.5～4.5cm）6月上旬 7丁目



クロクモエダシャクの翅<sup>はね</sup>は芸術作品のような色模様。この写真はわが家の玄関先のタイルの上で撮りました。幼虫の食樹はヒノキです。

ホシシャク（開張：4～5cm）6月下旬 本町地区



ホシシャクは透けた白い翅<sup>はね</sup>に黒い斑点をちりばめた弱々しい感じのシャクガです。昼間、薄暗い藪陰をひらひら飛ぶ可憐な姿には他のシャクガには見られない情緒があります。幼虫はイボタノキやネズミモチの葉を食べます。

## 2 ギンツバメ

ギンツバメ（開張：2.5～3cm）6月上旬 貝塚地区



ギンツバメは一見シャクガに見えますが、ツバメガの仲間、幼虫はシャクトリムシとは異なり、ガガイモの葉を食べる芋虫です。みずき野周辺には木陰の薄暗い場所によく見かけます。白地を黒い線で飾ったしゃれた姿のガです。



### 3 ヤママユガの仲間

クスサンとオオミズアオはヤママユガという大型のガの仲間です。昔はクヌギやコナラの林に、ヤママユガを代表するヤママユという名のガがたくさんいたのですが、近頃はさっぱり見られなくなりました。ヤママユのみならず、ヤママユガの他の仲間も激減してしまったように思われます。クスサンやオオミズアオも、以前はごく普通に見られましたが、近頃は滅多に見られなくなりました。

**クスサン**（開張：10cm 以上）9月下旬 7丁目



クスサンは大型のガです。後翅こうしの大きな丸い紋はフクロウの目玉のように見えます。幼虫はシラガタロウと呼ばれ、白い毛に覆われた大きな毛虫です。クリの葉を食べる害虫ですが、クリだけでなく、クヌギ、コナラ、その他多くの樹木につきます。この写真は文化財公園近くの路上で撮ったものです。

**オオミズアオ**（開張：10cm 程度）4月中旬 7丁目



オオミズアオはその名が示すとおり、大きくて緑がかった水色の美しいガです。幼虫の食樹はウメ、サクラなど。この写真はわが家のベランダに飛んできたオオミズアオです。

### 4 ヤガの仲間

ヤガにも大型の下翅かしに派手な模様のあるガがありますが、ヤガの多くは黒、褐色、茶色など地味な色をしており、あまり目立ちません。しかし次の2種はちょっとユニークな姿のヤガです。

## オスグロトモエ（開張：6cm 程度）7月中旬 どんぐり公園



オスグロトモエは比較的大型のヤガで、前翅に巴型ぜんしの紋を持ち、地味ながら美しさもあります。みずき野周辺には比較的多く、幼虫はおそらくニセアカシアの葉を食べていると思われます。

← 前翅ぜんしにある巴型ともえの紋部分の拡大図

## アオアツバ（開張：2cm 余り）11月中旬 7丁目



アオアツバはV字型こうぶんで口吻が長く突き出しており、ヤガとしては変わった姿です。このアオアツバはわが家の外壁に止まっていた。幼虫はマメ科植物の葉を食べているようです。

## 5 マダラガの仲間

ホタルガとキスジホソマダラは、マダラガという仲間に属します。マダラガの仲間は多様な姿をしていて、通常のカとはイメージがかなり異なります。

## ホタルガ（開張：5cm 程度）9月下旬 7丁目



ホタルガは中型のカで、黒地に白い帯のある翅はねと赤い頭に特徴があり、昼にひらひらと飛ぶので、よく目立ちます。外見も習性もホタルとは全く異なるのに、なぜホタルガと名付けられたのかよくわかりません。赤い頭と黒い翅はねをもつ姿がなんとなくホタルを連想させるのでしょうか。ただし、ホタルの赤い部分は頭ではなく、胸部です。ホタルガの幼虫はヒサカキやハマヒサカキの葉を食べます。

キスジホソマダラ (開張: 2.5cm 程度) 8月下旬 本町地区



キスジホソマダラは小さいガですが、色彩もきれいで、端正な姿です。幼虫はササやススキの葉を食べます。

## 6 ハチに擬態するガ

コスカシバ (開張: 2～3cm) 9月下旬 本町地区



コスカシバはスカシバガの仲間で、ハチに擬態(姿を似せること)しているといわれます。幼虫はサクラ、ウメ、モモなどの樹皮の中に侵入して、樹皮より中の部分を食害する害虫です。

カノコガ (開張: 3cm 余り) 6月中旬 本町地区



カノコガは昼行性のガで、花によくやってきます。ハチの一種に擬態しているとされています。幼虫はタンポポの葉を食べているといわれます。写真のカップルでは、下が雌と思われます。

## 7 その他のガ2種

マメノメイガ（開張：1cm 余り） 10月上旬 貝塚地区



マメノメイガは、茶色と白が組み合わさったきれいな翅をもつメイガです。すぐ葉裏に隠れてしまうので、撮影は案外難しい。この写真も翅を葉の裏側から撮ったものです。幼虫はマメ科植物の葉を食べます。

ギンスジオオマドガ（開張：雌4cm 余り、雄3cm 程度） 6月下旬 7丁目



ギンスジオオマドガはマドガの一種。わが家の庭で見つけ写真に収めました。雌雄大きさが違うようで、これは大きさから雄のようです。金属で作った細工物のよくなきれいなガです。幼虫の食樹はザクロやサルスベリとされています。

## ガに関する余談

ガはやはり一般的には嫌われものだと思います。

その第1の理由としては、最初に述べたように、チョウと比べると、色がきれいではなく、姿もよくないと思われていること。むしろけがわらしい虫とを感じる人もあるようです。

第2に、害虫というイメージが強いこと。かつて、ニカメイガやサンカメイガは稲作の大害虫でした。現在その被害は激減していますが、油断はできません。その他野菜や果樹や園芸植物には、ガの幼虫による被害が多く、それらの防除には農薬に頼らねばならない場合が一般的です。一時、外来種アメリカシロヒトリのサクラへの被害が問題になったのは記憶に新しいところです。



第3に、ガには有毒な種類が多いということ。特にドクガの仲間の幼虫には危険なものがあります。チャドクガ、ドクガ、モンシロドクガ、キドクガ、ゴマフリドクガなどの幼虫は毛状の毒針を持ち、もし幼虫に触れると肌に毒針が突き刺さり、激しいかゆみを伴う炎症を引き起こし、炎症は何日も続きます。成虫自体は毒針を持たないのですが、幼虫の時代に作った毒針が蛹さなぎの中に残り、それを体につけて飛び回るので、成虫に触れるのも危険です。ドクガの仲間以外にも、毒を持つガの幼虫がいますので、毛虫には触らない方がいいと思います。

みずき野周辺にも普通にいて、触るとひどい皮膚炎を生じるチャドクガの成虫と幼虫の写真を参考のために載せておきます。気持ちのよくない写真を載せてすみません。でも、こんなガや幼虫を見たら用心して下さい。幼虫はチャヤツバキの葉を食べます。



チャドクガ

(開張:雄2.5cm、雌3cm程度)

10月中旬 7丁目

チャドクガの終齢幼虫さなぎ(蛹になる前の幼虫)

(最長3センチ程度)

9月中旬 上高井地区

こう書くと、ガのイメージはますますわるくなりますが、そんなイメージを払拭させるガがいます。言わずと知れたカイコです。古代より最も重要な昆虫であるカイコもガの一種。その人類への貢献度は多大です。絹の産業は古代中国で始まったといわれており、紀元前3000年代半ばにはその記録があるそうです。のち、紀元前1000年ごろより中国から他国への絹織物の貿易が始まり、その後、絹と養蚕の技術がインド、ペルシャ、中央アジアを経てヨーロッパに伝わっていきました。日本でも古代から養蚕が主要な産業になりました(以上、電子辞書版ブリタニカより)。カイコは自然から人類への最高の贈り物のひとつです。

話は変わりますが、ガの多くは本来、夜になると灯火をめぐらして飛んでくる習性があります。なぜこのような習性をもつのか分かっていません。昔は家の電球の明かりや外灯にガが群がって、明かりの周辺を乱舞していたことを思い出します。しかし、みずき野では、家の光にひかれて窓ガラスにぶつかるガすらおりません。みずき野の町内には外灯があちこちに備えられていますが、その周辺にガの姿をほとんど見ることはありません。このあたりの環境がガの習性に合わないのでしょうか。

炎の光に魅かれるガの習性を描いた名画があります。速水御舟の「炎舞」(山種美術館所蔵)は重要文化財に指定されています。変えることができない習性に従って、燃え盛る炎の周りを乱舞するガたち。ガを主題にした最も美しい絵画ではないでしょうか。



速水御舟画 「炎舞」  
Wikimedia Commons より  
ダウンロード